

日本ロシア文学会
2005 年度(第 55 回)研究発表会
(2005 年 10 月 8-9 日・早稲田大学)
報告要旨集

日本ロシア文学会
2006 年 5 月

(A会場)

- A02 鳥山祐介 1760-70年代ロシアの頌詩作品と第一次対トルコ戦争
A03 岸本福子 B. A. ジュコーフスキーの寓話
A04 粕谷典子 イヴァン・トゥルゲーネフの戯曲
A05 木寺律子 ドストエフスキーの作品における〈罪の意識〉
A06 坂庭淳史 チュッチェフとヴェルシーロフ
A07 *Казакевич В.* ПОСЛЕДНИЕ ЧТЕНИЯ НА ВИЛЛЕ JEANNETTE
A08 三好俊介 ホダセヴィチとバラトウインスキー
A09 斉藤 毅 マンデリシターム『第四の散文』の読解
A10 石原公道 ブルガーコフ研究の現在
A11 上田洋子 クルジジャンフスキイ『モスクワの看板』
A12 長谷川麻子 ブロツキー «Часть речи»
A13 竹内恵子 ブロツキーの〈帝国〉論(ANNO DOMINI)
A14 神岡理恵子 エロフェーエフ『ある奇人の目で見たワシーリイ・ローザノフ』

(B会場)

- B15 五十嵐陽介 ロシア語における2種類の下降イントネーションパターン
B16 村越律子 談話標識としてのеще
B17 *Evseeva E.V.* ロシア語後続事象型補文におけるアスペクト分化
B18 小川暁道 ロシア語とウクライナ語における反復の時間表現
B20 *Клочков Ю.* Предупреждение и устранение грамматических ошибок японских учащихся
B21 *Накадзава А.* О происхождении и эволюции эпистолярных формул в берестяных грамотах
B22 *НИКИПОРЕЦ-ТАКИГАВА Г.* Новые компьютерные технологии для социолингвистических исследований
B23 グトワ・エカテリーナ 三島由紀夫の『金閣寺』のロシア語訳
B24 佐藤亮太郎 戦争文学における女性兵士像
B25 村山久美子 ゴレイゾーフスキーのアヴァンギャルド・バレエ
B26 八木君人 バフチンに抗うトウイニャーノフ
B27 野中 進 シクロフスキーにおける再認の概念
B28 近藤大介 文学論争としての文学の商業化

(C会場)

- C29 佐藤千登勢 映画『トゥルクシブ』における煽動性の機能
C30 平野恵美子 ディアギレフと画家達—バレエ・リュスのユニヴァーサルティ
C31 江村 公 モンタージュからデジタル・メディアへ
C32 前田 恵 グリゴリー・チュフライ研究
C33 森田まり子 モスクワのミュージカル
C34 有泉和子 ラクスマン来航時の日露交渉過程
C35 小野寺歌子 18世紀後半におけるロシア貴族のヨーロッパ修学旅行
C36 中神美砂 ダーシコヴァと『ロシアアカデミー辞典』編纂の社会的意義
C37 越野 剛 ドストエフスキーとロシアにおける火事のイメージ
C38 *Аникеев С.И. В.Я.* Ерошенко и язык эсперанто: известность и забвение
C39 *Орлянская Т.Г.* Лингвострановедческий курс «Российские новости — окно в русский мир»
C40 *Казакевич М.* «Медленное чтение» как синтез изучения языка, литературы и культуры
C41 塚田 力 中国黒龍江省遜克県アムール河沿岸のロシア族集落
C42 白村直也 ソヴィエト政権初期聾教育システムと全ロシア聾協会の教育活動

【A02】1760-70 年代ロシアの頌詩作品と第一次対トルコ戦争

鳥山 祐介

エカテリーナ二世の治世下におけるロシアとオスマン帝国との戦争は、クリミア領有や黒海制覇の契機をロシアに与えた。本報告の趣旨は、女帝の治世前半の第一次対トルコ戦争期(1768-74)のロシアで生み出された、頌詩をはじめとするいくつかの文学作品に焦点を当て、それらが有していた文化史的意義を明らかにすることにある。

トルコとの戦争は、コンスタンティノーブルを首都とする東ローマ帝国の再建を目指す「ギリシア計画」と呼ばれる構想を温めていたエカテリーナ政権にとって、ある種の文化的象徴性を持ちうるものでもあったが、この「計画」が公にされた後に行われた1787年からの第二次対トルコ戦争と異なり、1768年からの戦争は、「計画」が形を整えていくための条件が、上記の詩人達の作品や女帝とヴォルテールとの書簡など、各方面で準備される場であった。とりわけこの過程の中で、古典古代のモチーフを同時代の諸事件と重ね合わせるという伝統的な文学的手法が、古代ギリシアと中世のギリシア、即ち正教を奉じる東ローマ帝国のイメージが故意に混同されることで、国粹主義的な高揚感の表現手段として体系化されていったことは興味深い点である。また、ロモノソフがマレルブ等西欧の頌詩から引き継ぎ『ホチーン陥落に寄せて』(1739)などで用いた「東洋の制圧」「好戦主義と平和主義の葛藤」といった伝統的テーマも、ここへ来て新たなコンテクストの中で消化されていく。

具体的に検討の対象となるのは、スマローコフの頌詩やヘラースコフの叙事詩『チェスメの戦い』(1770)、ワシーリー・ペトロフ(1736-99)の頌詩などだが、特にポチョムキンらと個人的な交遊を持ち、政権の意向をうかがうことに敏感であった「公式詩人」ペトロフの例は興味深い。「第二のロモノソフ」とも呼ばれた彼の作品はその大仰な表現がしばしば非難されたが、同時に視覚的描写、「崇高」の表象という点においては後のデルジャーヴィンに引き継がれる要素を有しており、対トルコ戦争との関係のみならず、18世紀ロシア文学史の流れを見る上でも重要なファクターと考えられるからである。

(とりやま ゆうすけ, 東京大学 大学院生)

【A03】B. A. ジュコーフスキーの寓話

岸本 福子

B. A. ジュコーフスキーは38作ほどの寓話作品を書いているが、それらは「自由な翻訳作品」である。それには1806年にフロリアン、ラ・フォンテーヌから訳された18作の翻訳寓話の他、レッシングの散文寓話から1818年に訳された9作の翻訳や、1833年にゲーテから翻訳された寓話『ワシとハト』などがある。さらに彼はK. W. ラムラー、G. K. プフェフェル、J. W. グライム等の寓話作品も翻訳している。また1809年にジュコーフスキーは評論『寓話およびクリローフの寓話について』を書いているが、これは彼の唱える新しい寓話「詩的寓話」を論じた寓話論であった。今回の報告ではジュコーフスキーの寓話論と寓話作品全般を概観し、彼の寓話ジャンルの意味について考察した。

ジュコーフスキーが唱えた新しい寓話「詩的寓話」とは、①教訓的寓話の否定および教訓的寓話とのモラルの方向性の逆転(人間の内面世界から外的世界へと発信するモラル)、②寓話への個の概念の導入、③主情主義と性善説に基づくユートピア的合一世界観の三つの要素を満たす寓話であった。しかし寓話とは本来、自然における種の対立の概念および話の構成の対比形式から成立する。寓話のプロットには、作者や読者の多様な意味付けが可能である。しかしソップ寓話を範とするジャンルの規範に従うならば、寓話作家は寓話に多様な解釈を与えたとしても寓話の対比的構造を消滅させてはならない。ジュコーフスキーの「詩的寓話」理論の問題点は、対比的構造を本質とする寓話というジャンルにおいていかに性善説と合一の世界観を表明できるのかという点にあった。ジュコーフスキーの寓話論は、革新的な寓話論として評価できる。また、彼は、対立の自然観と対比形式を持つ従来型の寓話の自由な翻訳によって新しい要素も有意義な問題も提起した。しかし、ジュコーフスキーの理論と実践は矛盾しており、彼は自己のユートピア的合一世界観を翻訳寓話という創作上において実践していない。自己の世界観を如何なるジャンルにより表現し得るのか、あるいは世界観の表明のためにジャンルが変容するのか。彼の理論と創作の矛盾は、彼の寓話ジャンルの限界とも、ジャンル探求の一過程としても評価できるのである。

(きしもと ふくこ, 早稲田大学 大学院生)

【A04】イヴァン・トゥルゲーネフの戯曲

粕谷 典子

トゥルゲーネフの戯曲は、初期の詩作品や『獵人日記』と並行して執筆された。完成作としては 10 篇が残っており、いずれも発表当初から評価の分かれる作品だったが、チェーホフにあたえた影響も指摘されている。これらの作品には、戯曲作品としての新しさという面と、トゥルゲーネフの他の作品との相互関係という面の 2 点からの重要な意義がある。

まず戯曲の形式としての新しさには、当時常識と思われていた悲劇、喜劇のジャンルの枠を混交させたこと、またヴォードヴィルや当時書かれていた自然派の戯曲の形式をうまく利用し、そこに新しい心理の要素をはめこんだことなどがある。トゥルゲーネフは、それまでの悲劇的な英雄ではなく、平凡な人間の、一見すると滑稽とも思えるほどのありふれた日常の中に、深い悲劇があることに注目していた。また、社会的タイプとしての人物を造形しながらも、形にはなりにくい、揺れる個人の心理を描きだした。

トゥルゲーネフはまた、戯曲という形式自体を利用した心理描写や構成の実験も行っている。特に会話の積み重ねや場面の転換の恣意性という特徴である。戯曲自体がセリフ、つまり人物同士の会話の積み重ねから成り立っていることを利用して、登場人物の心理が風景描写と密接にかかわる小説とは異なり、人物の内面や関係を会話をとおして、第三者の解釈をつけないうまま、いわば内側から描くことが中心となった。ここでは心理は言葉に直接反映されなかったり、隠されたり、それを発した人物自身が驚くほど突然の意外な思いだったり、言葉と心理がうまくかみ合わない様子が生き生きと映し出される。また事件そのものを舞台外に排除して、舞台上では事件の裏にある人間の心理自体に光を当てた。

これらの戯曲の構成法は、トゥルゲーネフのその後の小説にも大きな影響をおよぼしている。大きな事件がなく人物や風景の描写が中心で、それらが入れ替わっていくことで物語を進行させる方法は戯曲の特徴を強く感じさせる。また、戯曲で表現された心理の動きは、後の小説にもつながっていく。

しかし、トゥルゲーネフの小説に対して、戯曲はそれを準備した面と、戯曲でのみ実現しえた対照的な面との両面をもっている。のちにトゥルゲーネフは、自らの戯曲を読み物としてとらえる提案をしているが、心理表現や構成、ト書きの微細さに着目することで、小説との関係がより見えてくるだろう。

(かすや のりこ、早稲田大学 大学院生)

【A05】ドストエフスキーの作品における〈罪の意識〉

木寺 律子

本発表ではドストエフスキーの作品に見られる〈罪の意識〉を考察する。ドストエフスキーの作品には、哲学的に体系の整った世界観のほかにも、直感的な世界感覚がある。本発表では、ドストエフスキーの思想そのものではなく、なかば潜在的な感覚、文化的なイメージのひとつとしての罪の意識がドストエフスキーの作品にどう現れているかを考察したい。

罪とは、まず何よりも、法や規範を犯すことである。西欧において、罪については、歴史上、主にキリスト教の分野で多くの議論がある。悪や罪という抽象的なものがリアリティをもって実際に現れる分野は、なによりもまず宗教であった。その後、宗教を離れた法の分野でも罪についての議論がなされるようになる。精神分析では、現前するものとしての罪ではなく、人間の心的領域にある罪の意識が指摘された。本発表では、すでに規範によって定められた罪についての考え方を踏まえ、罪についての人間の意識・認識を〈罪の意識〉としてテーマとする。

ドストエフスキーの諸作品には、心理的な罪、宗教的な罪、ジャーナリスティックな興味による犯罪などさまざまな次元の罪、罪の意識が多く小説のテーマとして登場するが、今回は『カラマーゾフの兄弟』を中心に分析する。『カラマーゾフの兄弟』では小説の前半部分では宗教的な場面、後半部分では裁判や法の場面が多く描かれ、それぞれの方面から罪の問題について論じられている。小説の前半部分でゾシマ長老が語る罪の連帯性の問題は、小説の後半部分でドミートリーやイヴァンが実際に行うこととなる。19 世紀のロシアでは自分が民衆から遊離していることを自覚していたインテリゲンティアが民衆に対して罪の意識を持ち、さらに知識を持つことへも罪の意識を感じていることは以前から指摘されてきたが、イヴァンの感じる罪の意識はこの知識人としての罪の意識でもある。自分の罪でない罪を背負おうとするドミートリー、イヴァン、小説の中程で描かれるイヴァンの教唆の言語の問題を考察する。

(きでら りつこ、大阪外国語大学 大学院生)

【A06】 チュッチェフとヴェルシーロフ
— 「ロシアのヨーロッパ人」と郷愁—

坂庭 淳史

チュッチェフ (1803-73) とドストエフスキー (1821-81) の作品世界や思想の類縁性はこれまでもたびたび言及されてきたが、詳細な研究は十分には行われてきていなかった。そのなかで昨年刊行されたガーチェヴァの『己の言葉がいかにか響くか、私たちは知る由もない (ドストエフスキーとチュッチェフ)』(Гачева А.Г. «Нам не дано предугадать, как слово наше отзовется...» (Достоевский и Тютчев). — М.: ИМЛИ РАН, 2004) は様々な視点から二人を論じており、今後の重要文献となるべき有意義な研究書である。今回の発表では、ガーチェヴァが論じている『「ロシアのヨーロッパ人 русский европеец」ヴェルシーロフ [小説『未成年 Подросток』1875] のプロトタイプがチュッチェフである』という独自の説に注目する。二人が同じような時期にロシアへの強い「郷愁」を抱いたことなど、チュッチェフとヴェルシーロフの形象に多くの共通部分があるのはガーチェヴァの指摘する通りだが、ヴェルシーロフが自称する「ロシアのヨーロッパ人」に果たしてチュッチェフが該当するのかという点については、より詳しく考察しておく必要がある。

今回の発表ではまずヴェルシーロフとチュッチェフの「ロシアとヨーロッパ」についての考え方を比較し、「二つの祖国」(ヴェルシーロフ)と「二つのヨーロッパ」(チュッチェフ)という特徴的な概念を導き出すことを試みる。次に、彼らに共通する外国生活やロシアへの帰国に含まれる意味とそれぞれの思想との関連性を分析する。さらに、ドストエフスキーが『プーシキン演説 Пушкин (очерк)』(1880)において『エヴゲーニー・オネーギン』の読み解きに用いた「土壌」に関する思考を踏まえながら、『未成年』執筆時にドストエフスキーがチュッチェフをヴェルシーロフのプロトタイプとした可能性を探る。

これらの考察を通して、同じような思想の持ち主に見えるチュッチェフとヴェルシーロフ、思想家ドストエフスキーの根本的な相違点を見出してゆく。また、ヴェルシーロフの形象との比較によって浮かび上がってくるチュッチェフの世界観の特徴、そして外交官としての長い外国生活や、彼が自覚している故郷の記憶の欠如がその思想に与えた影響を明らかにする。まとめでは、ロシア思想史におけるチュッチェフの位置と「ロシアのヨーロッパ人」の持つ意義についても考える。

(さかにわ あつし, 専修大学)

【A07】

ПОСЛЕДНИЕ ЧТЕНИЯ НА ВИЛЛЕ JEANNETTE

Вечеслав Казакевич

Русская литература по разным причинам не очень жаловала своим вниманием стариков. Не так легко найти русские романы, где главными героями были бы старик или старуха.

Дневники И.А. Бунина 1939-1945 годов, написанные на юге Франции, замечательны во многих отношениях. Во-первых, в них совершенно непривычным для нас образом изложена история Второй мировой войны. Во-вторых, они передают жизнь русских эмигрантов в захваченной немцами стране. И, наконец, самое главное для нас — эти дневники написаны старческой рукой и написаны во многом откровенно, повествуя порой даже о тайных эротических желаниях.

Попробуем не только понять, каким Бунин стал в старости, но и поразмышлять о феномене старости вообще.

Живя на снятой вилле, Бунин в основном предается занятию, которому можно только позавидовать: он днями лежит и читает. Бунин-читатель известен меньше, чем Бунин-писатель. Круг авторов, которых он выбирает, отзывы о них говорят не только о литературных пристрастиях Бунина. Перед нами нечто большее, чем простое чтение. Это прощание человека с жизнью, с литературой, с книгами, последний взгляд на них, приводящий к жестким и горестным выводам.

Любой человек, садящийся писать дневник, вольно или невольно превращается в героя этого дневника. Вдвойне это относится к Бунину, который не просто делал небрежные повседневные записи, а шлифовал свой дневник как настоящее художественное произведение. Рассматривая Бунина в качестве литературного персонажа, приходишь к неожиданному заключению: наиболее близкими ему литературными персонажами были герои тех писателей, которых он больше всего ненавидел.

(Kazakevich V. 富山大学)

【A08】ホダセヴィチとバラトウインスキー

三好 俊介

①発表の狙い：ホダセヴィチとバラトウインスキーは、作風の関連が漠然と指摘されてきたが、本格的な比較研究はまだない。報告者は、両詩人の最大の共通点は、詩作自体について問う詩風にあると考える。二人は共に、詩文学の退潮・危機の時代(各々ロシア詩の「黄金時代」,「銀の時代」の衰退期)に生き、詩とは何かという思索を先鋭化させ、多くのメタポエトリー的詩篇(詩や詩人自体についてうたう詩)を残している。

ホダセヴィチは、バラトウインスキーの提出した詩論をどう受けとめ、いかなる組換えを行い独自の詩論を提出したのか。本報告は、ホダセヴィチの代表的詩集『重い堅琴』の作品分析により、この点を検討した。

②分析と結論：二人は共に、「詩」と「詩人」の間の埋めがたい間隙を意識する詩人であった。遙か彼方から「詩」を望むかのような寂しさと疎外感が、二人の作品ではしばしばうたわれ、この点で二人は一つの系譜をなす。だが、両者の詩学には根本的な違いがある。

バラトウインスキーは、詩人とは「詩と現実のどちらにも適応せずに、その中間をさまよう存在」だと考えた。ホダセヴィチはこの主張のうち、バラトウインスキー独自の部分(詩人の彷徨という概念)を踏襲し、19世紀ロマン派詩学に一般的な部分(「詩←→現実」という単純な二項対立)は捨て去った。ホダセヴィチはバラトウインスキーとは違い、「詩と現実は天地のように一対一で向き合い、その間は何もない空間で一気に駆け抜けられる」とは考えない。ホダセヴィチによれば、現実とは一つではなく多様であり(ポーランド人、ユダヤ人の両親を持ち、亡命をも経験した彼にとり、この見方はごく自然だったはずだ)、多くの層となって、「詩」という中心を波紋のように取り囲んでいる。詩人は日々この波紋を踏み越えるたびに(「詩」に一步近づき、または遠ざかるたびに)、身体に走る苦痛を知覚する。ホダセヴィチにとって詩を書くこととは、この身体感覚を丁寧うたってゆくことであった。これにより、ホダセヴィチの作品はバラトウインスキーの観念性を脱し、激動の20世紀に見合う迫真性を獲得する。

ホダセヴィチは「波紋」を踏み越えつつ、次第に、遠心的に「詩」から遠ざかった。亡命を経てある時期から彼は詩を書かなくなり、ロシア文学をめぐる批評や評伝に転向する。だが、これは詩からの断絶といえるのか。彼は散文を著す際も、詩を書く時と同様、遙かに「詩」を振り返りつつ身体に走る痛みを記していた。その意味ではホダセヴィチは生涯、詩人であった。

(みよし しゅんすけ, 前外務省専門調査員)

【A09】法廷の歌姫—マンデリシターム『第四の散文』の読解に向けて

斉藤 毅

○.マンデリシタームの『第四の散文』(1930)は、彼が翻訳剽窃の濡れ衣を着せられ、訴訟にまで発展した、いわゆる「オイレンシュピーゲル事件」(1928)の後、当時のソヴィエト文学体制に向けて放たれた「パンフレット」(攻撃文書)であるが(発表はされなかった)、この文書の執筆は、結果として、彼の詩作が5年間の沈黙を経て、再開される契機となった。こうした重要な位置にあるにもかかわらず、これまでのマンデリシターム研究において『第四の散文』は、本格的な考察の対象とされることがなかったように見える。その理由の一つには、この文書が単なる政治批判と見なされていることがあると思われるが、パンフレットという体裁を取っているとはいえ、タイトルが明示するように、これは本質からして文学テキストであり、その理解のためには、読解という作業が求められる。実際、このテキストは十分に難解であり、ここにもまた、考察が避けられてきた理由があると思われる。こうした状況に鑑み、本発表では、『第四の散文』の読解を行なうためにとるべき、基本的な方向性を提示したいと思う。このテキスト全体を貫く主題は、法(法律に限定されない広い意味で)と文学—というよりは詩、あるいは歌—との根本的な関わりであると考えられるが、こうした視点から、ここでは以下の点について考察したい。①テキスト成立の契機となった「オイレンシュピーゲル事件」を始めとする、一連の事件の経緯。これらの事件については、お決まりの「詩人の迫害」という神話から脱して、再検討する必要がある。②マンデリシタームの創作全体における『第四の散文』の位置づけ。とりわけ『エジプトの切手』(1928)との関係について。③『第四の散文』における諸形象—部族、畜群の形象と結びつけられた「文学者=作家=もの書き」の形象、および「ユダヤという称号」を与えられた詩人の形象の機能について。とくに「ユダヤ」の形象については、他形象との関係から、理解されなければならない。さらに余裕があれば、この作品の終結部に突如、現われる「多言語的」テキスト性の意義についても考えたい。

(さいとう たけし, 電気通信大学)

【A10】ブルガーコフ研究の現在

石原 公道

1991 年ブルガーコフ生誕 100 年祭後、ブルガーコフ研究は新たな段階に入ったようだ。1995-2000 年に 10 巻本選集(編者 В.Петёлин 1989-90 年の 5 巻本刊行以後の各種ヴァリエーションの集成)や 2002 年 8 巻本選集(編者 В.Лосев)が刊行されたが、テキストの問題は残る。とりわけ『巨匠とマルガリータ』に関しては大別して、1966-72 年に未亡人エレナにより用意されタイプされたもの、1973 年《芸術文学出版社》版(А.Саакянц 編集)、《ドニプロ》版、1990 年 5 巻本テキストという 4 種のテキストが通行している。(Л.Яновская 『ミハイル・ブルガーコフ覚書』2002, с. 348)。近年『巨匠とマルガリータ』の異稿が各種出版されていることは上記選集等からも知られるが、なおその傾向は続き、研究者にとって喜ばしい(例えば Великий канцел. СПб.: «Нева», 2005)。これらに関して、レーニン図書館手稿部ブルガーコフ・フォンドの伏魔殿についてのヤノフスカヤの発言はたいそう興味深い。1966-67 年に未亡人エレナが保存していたブルガーコフのアルヒーフが、続いて 1969 年に彼の蔵書がレーニン図書館手稿部ブルガーコフ・フォンドに譲り渡された。特に後者は、1969 年 12 月 10 日朝マリエッタ・チュダコーワが夫とともに、エレナの古い大きなトランク一杯に詰め込んで持っていった旨のエレナのメモが紹介されている。チュダコーワは 10 月にこのアルヒーフの研究者、保管者に定められていた。ペレストロイカ期にフォンドのファイルを調べることのできた筆者は、この際の受領書を見つけることができなかった(Л.Яновская 同上 с. 71-73)。このことに『巨匠とマルガリータ』の豪華本を刊行したチュダコーワは何も答えてはいないようだ。ブルガーコフ・フォンドの彼女の後任が В. И. ローセフだという。

上記«Великий канцел»にはブルガーコフの墓所について、おそらくロシアでは最初となる記述があり、また『ミハイル・ブルガーコフ家系図』Б.Мяков(2003 年ブルガーコフ家及び三人の妻に関わる全系図とコメント)にはエレナに関して注目される言及がある。こういう状況で、最初期からのブルガーコフ研究家で在イスラエルの文献学者 Л.Яновская 『ミハイル・ブルガーコフ覚書』を中心として、ブルガーコフ研究の現在について考えてみたい。

(いしはら きみみち)

【A11】シギズムンド・クルジジャンフスキ『モスクワの看板』(1924)―都市における日常の記念碑の詩学

上田 洋子

キエフで活動していたシギズムンド・クルジジャンフスキ(1887-1950)が、モスクワへ居を移したのは 1922 年のことである。以来、作家は街を隈なく歩き回り、歴史博物館付属図書館で文献を調べるなど、モスクワを「親しく重要なテーマ」として研究する。その成果は、『モスクワの看板 Московские вывески』(1924)、『消印:モスクワ Штемпель: Москва』、『2000』、『瞬間を集める Коллекция секунд』(1925)という一連のオーチェルクとして発表されることになる。『モスクワの看板』はこれらの中でもっとも早い時期に書かれたもので、『30 日 30 日』の 1925 年第 3 号に掲載された。

キエフ時代のクルジジャンフスキは哲学色の濃い短編を得意としていた。言葉の意味内容のみならず、文字・音などの外的側面をも駆使して書かれた初期作品集『天才児向け童話集 Сказки для вундеркиндов』の作品群は、短編とはいいつつも凝縮した空間を持つ、読みごたえのあるものである。表題に《童話・物語 сказка》とあるとおり、クルジジャンフスキの初期作品は、昔話や寓話のジャンルに見られるような、条件性(условность)の強い筋を持っている。表題で提起されるテーマが《文学=言葉の芸術》という枠の中で複数のヴァリエーションによって変奏され、イメージの重層化によって作品世界が拡大されていく、というのが初期作品の基本的な構造である。『モスクワの看板』をはじめとする 20 年代のモスクワオーチェルクは、《モスクワ》という現実の対象を題材とすることにより、この作家の哲学的で、ともすれば形而上の世界に傾いてしまう、初期作品に顕著に見られる傾向に歯止めをかける。言語存在および人間存在の意味づけという、クルジジャンフスキ作品の根底を流れるテーマは、都市モスクワの空間に現れた現象を通して考察されることにより、より明確な表現を獲得し、後の中編作品における現実に立脚した筋の展開の基盤となってゆく。

今回の発表では、世界を可視化するものとしてクルジジャンフスキ作品の中で大きな役割を果たしている《быт》、つまり現実世界における人間の生活の営み・日常という要素に焦点を当て、この作家の《存在―日常―虚構 бытие―быт―бы》という 3 つの領域に関わる詩学の構造を分析した。

(うえだ ようこ, 早稲田大学 大学院生)

【A12】新しい抒情詩のかたち

—プロツキー «Часть речи» (1975-76)—

長谷川 麻子

この連作には«Часть речи»という少し奇妙な題名がついている。このタイトルから作品の内容を正確に予測できる人はそれほど多くないだろう。これは、共同で語りをすすめる常に二重の「私」という作品の要、つまり抒情的な主題とそれを書き記す詩人のあり様の叙述とが同時に進行する作品の構造からみちびきだされるものなのだ。

こうした並行状態(所謂メタな視点の共存)は、プロツキーの初期作品にすでにみとめられ(«Теперь все чаще чувствую усталость,...» 1960), その重要な特徴のひとつである。本発表ではこれを読解のための指針に、プロツキーにおける言語のあり方を検討し、詩の位置づけを明確にする。こうした視点から連作«Часть речи»をみると、これがたんなる抒情的主人公の経験の観察記録ではなく、詩人プロツキー生成のプロセスを逐一記述する作業であることがわかる。別の言葉でいえば、それはプロツキーによる創作である以上に、(天地創造という意味で)詩人プロツキー創造の現場ということになるだろう。

ほぼ同数行からなる詩を二十連ねたこの連作は、「どこでもない場所から愛をこめて」挨拶をおくってくる「私」の嘆きで始まり、ある「自由」にたどりつく。自らの悲劇を言葉によって捉えるという自由への過程で、観察分析の対象だった「私」が次第にその主体へとかわっていく。その結果我々読者に提示されるのは、あるまとまった作品というよりも、詩の生成現場そのものであり、詩の定義づけの試みとなる。プロツキーの詩がしばしば始まり以前あるいは終わり以後の何も書かれていない光景でしめくられるのはこのためだ。

また、こうした態度の裏にあって見逃してはならないのが、不滅の言語に対して死すべき有限の人間存在という冷静な認識である。言語による抒情的主人公の喪失の克服をめざし、それを言語の適用範囲拡大の契機とする詩作は、詩人にとって世界における存在手段かつ悲劇からの脱出手段であると同時に、生きながらにして死後の世界を垣間見、死を先取りすることで現世を超越する方法としても不可欠であった。そうした意味での「書く私」は、抒情詩という装置そのものについてもあらためて考えさせてくれる。

(はせがわ あさこ, 早稲田大学 大学院生)

【A13】プロツキーの〈帝国〉論

—詩 «ANNO DOMINI» における父性原理を中心に—

竹内 恵子

本報告は、プロツキーの〈帝国〉について多角的な視点から論じたものである。この〈帝国〉は、プロツキー研究の初期段階で初歩的なイメージが提示されただけで現在に至っているため、発表者は 1968 年の詩 «ANNO DOMINI»(ラテン語原題)を枢軸とした多様な解釈を試みながら、〈帝国〉像を改めて捉え直すことを目的とした。また、従来のプロツキー研究に欠けがちな精神分析批評の観点にも踏み込んでみた。

近年刊行されたコンコーダンスに基づいて調査したところ、実際に詩作品において〈帝国=империя〉および直接派生した単語が使用されている例は、1965 年から 1980 年に集中している。プロツキーの〈帝国〉とは、古代ローマ帝国型の全体主義的機構を土台としたものを祖国ソ連の実情に仮託させた上で、亡命体験を通じて世界史的規模にまで敷衍させた詩的トポスである。しかし前述の調査によれば、'80 年代以降のプロツキーは〈帝国〉の記述を激減させていく。発表者はその理由を探るため、「ANNO DOMINI」の詳細なテキスト解釈を行った。

そこで重要なことは、祖国である〈帝国〉を指すのに最も一般的な *родина* ではなく、父=*отец* から派生した *отечество*, *отчизна* が使われているという点である。これは〈帝国〉が父性原理に基づいて構築されていることを示すものであり、その背後には前年に作者プロツキー自身が父親になったという伝記的背景がある。また、父性原理と母性原理の対立はひいては男性原理と女性原理の対立そのものであり、その視点に基づく「ANNO DOMINI」のテキスト全体が容易に構造分解できる。

本報告においては更に、プロツキーの〈帝国〉はドゥルーズ=ガタリ的な「オイディプス化された家族主義の帝国」という概念に連動するものであり、プロツキーにとって自らが「父親」であるという意識と、〈帝国〉のテーマが密接に繋がるものであることを証明した。なぜなら、1972 年の詩「オデュッセウスからテレマコスへ」において、自らの亡命とエディプス・コンプレックスの問題について、プロツキー自身が明確に関連づけているからである。'80 年代のプロツキーには「放浪者—独身者—亡命者」のイメージが濃厚であるが、そこには更にベンヤミン的な「都市の遊歩者」としての形象も重複していくことになる。

(たけうち けいこ, 東京大学 大学院生)

【A14】断片から物語へーヴェネディクト・エロフェーエフ『ある奇人の目を見たワシーリイ・ローザノフ』

神岡 理恵子

ヴェネディクト・エロフェーエフ(1938-90)の散文作品『ある奇人の目を見たワシーリイ・ローザノフ Василий Розанов глазами эксцентрика』(1973)は、サミズダートの雑誌『ヴェーチェ Вече』に寄せて書かれた。当時住むところのなかったエロフェーエフが身を寄せていた先に集まっていたネオスラヴ派のサークル(通称 *вечисты*)のすすめで、家賃代わりに執筆したと言われている。

恋人にふられ自殺手段を探して彷徨っていた主人公は、毒を求めて薬剤師である友人を訪ねるが、そこでソヴィエト時代には最もタブーであった作家・思想家の一人であるワシーリイ・ローザノフ(1856-1919)の著作をすすめられる。この友人に手渡された毒を手を、借りてきたローザノフを読み始める。やがて現実と虚構の狭間で、本から飛び出したローザノフ本人と戯れつつ、主人公はどん底の状態から救われていく。

この作品には、断片的な特徴をもつローザノフのテキスト—主に『孤独』(1912)『落葉 I・II』(1913-15)—からの引用がふんだんに用いられている。主人公は時にそれらの引用句と、また時には本の中から飛び出したローザノフと対話しながら様々な思いを吐き出していくが、作者はローザノフのテキスト=断片をどのように自作に取り入れ、独自の物語をいかに組み立てていったのか。

引用はエロフェーエフの創作に共通する最も特徴的な手法のひとつであるが、この作品ではまず引用があり、そこから物語が作られている点が代表作『モスクワ—ペトウシキ』、『ワルプルギスの夜』とは異なることに注目した。さらにこの作品においては、引用が物語のプロット(自殺を考えていた主人公が生きる力を再び見出していくという心の動き)と密接に結びついて機能していることを、物語の進行を中断する引用/物語の進行を促す引用等を例示しながら証明した。そしてなぜ作者は引用という「断片」から「物語化」という方向へむかったのか、エロフェーエフにおける一人称の語りや主人公の問題(これらは作者をも彷彿とさせるが、作者=主人公ではないことを承知した上で作家の戦略であった)、そして彼がローザノフのテキストに何を見出したのか(作者は「弱さ」や「憐れみ」に意味を見出したローザノフに共感し、主人公の死から生へという物語に重ね合わせてローザノフのテキストを再生し語り直した)を手掛かりに、考察を試みた。

(かみおか りえこ, 早稲田大学 大学院生)

【B15】ロシア語における2種類の下降イントネーションパターン

五十嵐 陽介

ロシア語には、基本周波数(F0)がストレス音節で下降し、文末まで低く続くイントネーションパターン(下降パターン)が存在する。このパターンに関して注目されるのは、ストレス音節に対する F0 下降のタイミングがかなり顕著に変動することがあるという事実である。具体的には、下降開始点にあたる F0 ピークがストレス音節の直前に生じる場合と、音節の中心付近に生じる場合がある。下降のタイミングが異なるこれら 2 つの F0 曲線は、1) 単一のパターンが変動した結果に過ぎないという解釈と、2) 異なる 2 種類のパターンであるという解釈が可能である。

本研究は、“imitation task”と呼ばれる音声知覚と音声産出を組み合わせた手法を用いて、ロシア語には F0 下降のタイミングの差異により範疇的に区別できる 2 種類の下降パターンが存在するとする仮説(範疇仮説)の妥当性を検証する。この実験手法は以下のように要約できる。1) 分析再合成を用いてピークの位置を連続的に変動させた 15 種類の刺激音を作る。2) その刺激音を被験者にランダムに聞かせ、聞いたものを模倣し産出するように指示する。3) 産出された音声におけるピーク位置を計測し、刺激音におけるピーク位置と比較する。もしロシア語に F0 下降のタイミングの差異により範疇的に区別できる 2 種類の下降パターンが存在するのならば、産出におけるピーク位置は 2 種類のグループに離散的に分布するはずである。反対にもし下降のタイミングは連続的に変動するのならば、産出におけるピーク位置は連続的な分布を示すはずである。

実験結果は概して範疇仮説の妥当性を示唆するものとなった。刺激音におけるピーク位置は連続的に変動するにもかかわらず、実験に参加した 6 人の被験者のうち 4 人は 2 種類のグループに離散的に分布するピーク位置を産出した。この実験結果は、ロシア語には F0 下降のタイミングによって範疇的に区別される 2 種類の下降パターンが存在していることを示唆するものである。

(いがらし ようすけ, 理化学研究所)

【B16】 談話標識としての еще

村越 律子

①談話標識(discourse marker)とは、談話がどのように作られているのかを示す語や表現である。それらは話し手が今言っていることと、すでに言及されていること、あるいはこれから言おうとしていることとを結びつける働きをしたり、今言っている発言の構造を明らかにする手助けをする。また、話し手が自分の発言の内容や他人の発言の内容をどのように考えているのかを表したりする。ロシア語における典型的な談話標識は不変化辞(частицы)で、その数は70を超えと言われる。発表では主要な談話標識の一つである еще を取り上げて、談話分析に不可欠なその構造的な側面と機能的な側面について論じたい。

②副詞としての еще には付加、未完了、参照点への未到達、参照点とのギャップといった意味が観察される。このような文レベルの命題の意味が談話レベルに関連づけられると、前の発言で述べられていることの非妥当性、根拠不十分、不必要性などの意味に発展する。また、相手の主張と現実とのギャップ、実像と虚像の対比が強調されることもある。機能面では、еще は文頭に用いられて前後の発言のインターフェイスとして働く。さらに、表出(話し手の不満や不快感をマーク)、コンテキスト形成、相手に対する働きかけといった特徴があり、こういった構造的、機能的、語用論的な意味が法やアスペクトなどの他の文法手段と相関的に関連しあって、テキストの結束性(coherence)を支えるのである。(例：— Возьми новый чемодан, он хорошо очень выглядит. — Еще чемодан с собой таскать!)

③テキストの結束性がロシア語研究において持つ意味は大きい。ロシア語は英語に比べると、テキストがコンテキストに依存する度合いが大きい。つまり、コード(形式的文法)によって読みが自立的に成立するというより、コンテキストや話し手の知識体系を補完しながら読みを成り立たせる傾向があるということである。その意味において、テキストの「できのよさ」を支える文法手段である談話標識にはもっと関心が寄せられてもよいだろう。

(むらこし りつこ, 上智大学)

【B17】 時制対立のないロシア語後続事象型補文におけるアスペクト分化を左右する条件—否定が関係した場合—

Evseeva Elena Viktorovna

従来、否定が関係した場合、時制対立のない環境における動詞のアスペクト選択は事象の限界性にもとづく制約(「限界的事象ならば完了体、非限界的事象ならば不完了体」)によってだけでは説明できず“望ましくない”事象の“突発的”生起への危惧をあらわす場合、完了体が選択される場合がある(「制御事象ならば不完了体、非制御事象ならば完了体」; かりに制御性にもとづくアスペクト選択制約の顕現とよぶ)といった点についてよく指摘が行われる。

しかしそのようなアスペクト選択が否定文全般について行われるわけではない。本研究では、主語制御動詞および目的語制御動詞がとる後続事象型補文において、当該制約がどういう範囲で適用されるかを詳しく整理し分析する。その結果、従来の研究で傾向や可能性の指摘に留まっていた制約の適用条件について、a) 主文動詞のタイプ(どのような種類の主語制御動詞/目的語制御動詞であるか)、b) 否定辞の位置(補文否定か主文否定か)、c) 主文動詞のアスペクト(不完了体であるか完了体であるか)、という違いによって、当該の制約の働きが、i) <厳格>に現れる場合(主文動詞の意味から補文事象に要求される制御性の有無に厳格に従い、補文動詞としては不完了体か完了体かの一方だけが用いられる場合)、ii) <対立的>に現れる場合(補文に基本的に制御事象が要求されることから、不完了体が用いられるのが原則であるが、時に非制御事象の生起への虞を表し完了体が用いられることもある場合)、そして、iii) その働きが<中和>する場合(制御性の有無に関する意味の差なくいずれの体も用いられる場合)があることを示した。

(エブセーバ・エレナ, 京都大学 大学院生)

【B18】ロシア語とウクライナ語における反復の時間表現の対照研究

小川 暁道

ウクライナ語では接頭辞 *що-* + 生格と接頭辞 *що-* + 対格の形式がある。接頭辞 *що-* が付加され、時間の反復を表す。これら二つの形式によって表される二つの反復の性質がある。一方は単純反復、すなわち質的・量的変化を伴わない動作の反復、もう一方は増幅反復、すなわち動作の過程における変化を伴う反復である。これらの形式で使用される名詞は限られており、*вечір* 「晩」(*щовечора, щовечір*)、*день* 「日」(*щодня, щодень*)、*мить* 「瞬間」(*щовечора, щовечір*)、*ніч* 「夜」(*щоночі, щоніч*)、*раз* 「回、機会」(*щоразу, щораз*)、*ранок* 「朝」(*щоранку, щоранок*)、*рік* 「年」(*щороку, щорік*)、*зима* 「冬」(*щозими, щозиму*)のみである。これ以外の名詞はこれら二つの形式のうち接頭辞 *що-* + 生格の形のみで反復を表す。以前の調査では、両方の形式をとる名詞は接頭辞 *що-* + 生格では単純反復を、接頭辞 *що-* + 対格では増幅反復を表す傾向が見られ、またこの傾向には地域差があった。しかし、接頭辞 *що-* + 生格で増幅反復を、接頭辞 *що-* + 対格で単純反復を表す場合もあり、これらの対応にはゆれがある。

ウクライナ語では形式と意味の対応においてゆれがあるように、ロシア語の反復表現 *каждый* ~ や *с каждым* ~ などで表される形式と単純反復-増幅反復といった意味の対応関係においてゆれが存在するかどうかを、先行研究における記述を概観しつつコーパスを用いて調査する。反復の時間表現ではないが、単一動作の完遂の「漸次性」という意味的要素は増幅反復と共通する要素である。増幅反復の性質については、この意味的要素に注目して分析・整理する。また、反復の時間表現の状況語以外の形式的要素に注目し、動詞の語彙的意味や副詞などの反復の指標について、状況語とそれらの反復の要素との用例の中での対応関係を分析した上で整理する。ウクライナ語とロシア語におけるこれらの調査の結果を対照し記述することが本発表の目的である。

(おがわ あきみち、東京外国語大学 大学院生)

【B20】

Предупреждение и устранение грамматических ошибок японских учащихся в речи на русском языке
Клочков Юрий

Предупреждение и устранение ошибок представляет собой работу над зафиксированными типичными ошибками при помощи доступных для методики средств, поэтому для предупреждения устранения ошибок используются преимущественно те средства и приемы, которые разработаны для ознакомления с новым материалом и выработки навыков его употребления в устной и письменной речи.

На начальном этапе изучения русского языка японские учащиеся, попадая в ситуацию учебного общения на русском языке, не всегда чувствуют себя уверенно. Они довольно часто переживают психологический стресс – определенную эмоциональную напряженность. Это в значительной мере способствует нарушениям в их речи, пассивности, слишком долгому обдумыванию ответа, путанице мыслей, оговоркам и т.п.

Работа по предупреждению ошибок на уроке тесно связана с корректирующей деятельностью преподавателя, исправлением и устранением ошибок. В процессе выполнения тренировочных упражнений коррекция проводится жестко, широко используются корректирующие приемы например, «подсказывающие» вопросы, инструкции, схематические и смысловые опоры.

К работе по исправлению и устранению ошибок активно привлекаются сами учащиеся, проводится фронтальная, групповая, индивидуальная работа над ошибками. В качестве специальных приемов исправления и устранения ошибок рекомендуются анализ и сопоставление контекстов, работа с компьютером, технические средства обучения, обсуждения высказываний, игры с применением раздаточных материалов, средств наглядности.

Приемы предупреждения и устранения ошибок отвечают основным требованиям коммуникативно-деятельностной концепции обучения иноязычному общению.

(ユーリー・クロチコフ、駒澤大学)

[B21]

К вопросу о происхождении и эволюции некоторых эпистолярных формул в берестяных грамотах

Ацуо НАКАДЗАВА

В настоящее время мы располагаем приблизительно тысячей единиц берестяных грамот XI—XV вв. новгородского и другого происхождения, большая часть которых связана с частной перепиской. Как уже отмечено некоторыми исследователями (Н.А. Мещерским, Д. Вортом, А.А. Зализняком и другими), в берестяных письмах довольно часто встречаются такие эпистолярные адресные формулы, как *от X к Y*, *поклонение от X к Y*, *поклонъ от X к Y* и другие. Очень интересно, что каждая формула (кроме формулы *от X к Y*) как будто имеет свой “сезон”: одна формула использовалась преимущественно в одно время, потом выходила из употребления, сменяясь другой формулой (см. таблицу).

Адресные формулы в берестяных грамотах

- А) XI—1 четв. XII в.: *от X к Y* (13); *поклонание* (4)
 Б-I) ок.1125—ок.1160 г.: *от X к Y* (26); *поклонание* (6)
 Б-II) ок.1160—ок.1220 г.: *от X к Y* (39); *поклонание* (28); *поклонъ* (3)
 В) ок.1220—ок.1300 г.: *от X к Y* (17); *поклонание* (3); *поклонъ* (10)
 Г-I) ок.1300—ок.1360 г.: *от X к Y* (7); *поклонъ* (22); *бити челом* (5)
 Г-II) ок.1360—ок.1400 г.: *от X к Y* (5); *поклонъ* (30); *бити челом* (14)
 Д) ок.1400—: *от X к Y* (2); *поклонъ* (14); *бити челом* (23)

Поскольку проблема происхождения новых адресных формул и их исторической эволюции была еще недостаточно изучена, докладчик попытается выяснить основные причины этого явления на основании историко-лексикографического и источниковедческого анализа берестяных писем.

Детальный анализ текста грамот приводит нас к следующим выводам:

1. Формула *поклонание от X к Y*, вероятнее всего, восходит к церковному обычаю. Выясняется, что большинство грамот, имеющих эту формулу, было написано духовными лицами. Кроме того, формула *поклонание* наблюдается и в ранних эпистолярных произведениях, сочиненных церковными книжниками, например, в Послании Кирилла Туровского к игумену Василию в конце XII в.

2. Формула *поклонъ от X к Y* возникла путем упрощения церковнославянской словоформы *поклонание*. Распространение формулы *поклонъ*, как светский вариант формулы *поклонание*, несомненно, связано с популяризацией обучения грамоты в Новгороде в XIII—XIV вв. Об этом свидетельствует знаменитая ученическая “тетрадь” мальчика Онфима (№ 199: вторая треть XIII в.), где читается фраза “поклоно от Онфима ко Даниле”.

3. Мы склонны отнести происхождение формулы *челобитье от X к Y* к княжескому посольскому обычаю. Можно полагать, что речевая формула (“челомъ бью тебе, господине...”), передаваемая через послов устно при переговорах между князьями, стала употребляться в письменном форме среди горожан Новгорода в XIV—XV вв. Анализ грамот новгородского боярина Онцифора Лукиничя (№№ 354, 358: середина XIV в.) позволяет предположить, что такое заимствование происходило прежде всего у новгородских бояр, которые находились в постоянном контакте с московскими и литовскими князьями.

(なかざわ あつお, 富山大学)

[B22]

Новые компьютерные технологии для социолингвистических исследований

Галина НИКИПОРЕЦ-ТАКИГАВА

При помощи квантитативного метода анализа на основе новых компьютерных технологий и баз данных сервиса «Интегрум» я предприняла попытку исследовать динамику присутствия «слов агрессивной семантики» в языке СМИ. Анализ отражал актуализацию исследуемых лексем. Факторы, влияющие на возрастание частотности, были проанализированы на примере слова *агрессивный*.

Заемствование русским языком слов с корневой морфемой *агресс* началось с прилагательного, которое появилось в русском языке, как и во всех славянских, во второй половине XIX века из французского языка.

Первоначально слово *агрессивный* имело значение «враждебный, наступательный, стремящийся к захвату, к завладению» и активно употреблялось в газетно-публицистическом стиле речи в контексте поведения разных недружественных стран и в научном стиле речи для обозначения веществ или среды, которые могут оказывать разрушающее действие.

Контекстный анализ 43.800 примеров употребления слова *агрессивный* в СМИ последних 15 лет показал, что в конце XX века в русском языке произошло вторичное заимствование этого слова уже из английского языка. Новое прилагательное *агрессивный* сначала вошло в бизнес-дискурс и в спортивный дискурс, тиражировалось СМИ, стало более частотным и начало употребляться в разных дискурсах (особенно частотно в описаниях внешности, стиля, дизайна, цвета, манеры поведения, характера).

Как свидетельствуют словари, ранее заимствованное из французского языка слово *агрессивный* употреблялось в военно-политическом и научном дискурсах как негативная характеристика. В этих дискурсах слово продолжает оставаться характеристикой преимущественно отрицательной. Новое слово *агрессивный*, заимствованное из английского языка, имеет положительно-оценочное значение: в бизнес-дискурсе *агрессивный* стиль поведения явно поощряется, *агрессивными* должны быть политики и их действия. *Агрессивный* начинает употребляться в сочетаниях со словами положительной семантики, прочно укрепляется в узусе и замещает всё более широкий круг слов положительной семантики (*энергичный, активный, яркий, сочный*). Среди причин появления новой лексической сочетаемости — снижение языковой компетенции, стремление использовать клише, внедрённые СМИ в языковое сознание, языковая мода на иностранные слова и неточное понимание заимствуемого слова.

Таким образом, в русском языке появилось два омонима с антонимичным значением. Прилагательное *агрессивный*, в зависимости от контекста, может выражать и положительную и отрицательную оценку. Иногда определение полюса оценки затруднительно, значение оказывается размытым. Однако, учитывая общее состояние морали общества, активный процесс переоценки ценностей и стандартов поведения, в результате которого агрессивный стиль поведения оказывается предпочтительным и даже вызывает симпатию, спорным словоупотреблениям с большей уверенностью можно приписать положительную оценочность.

(Galina Nikiporets-Takigawa, 東京外国語大学)

【B23】三島由紀夫の『金閣寺』のロシア語訳について
グトワ・エカテリーナ

三島由紀夫の原文と Григорий Чхартишвили によって行われたロシア語訳«Золотой Храм»を比較し、文体論的な研究を試みた。

1. レアリアや固有名詞の翻訳法。『金閣寺』には日本独特の日常生活の物、概念、事情を表現するレアリアや地理学的な名称、寺や歴史的な人物の名称等がたくさん登場する。ロシア語には、正確な等価語がないため、共通の基盤での翻訳が不可能であり、従って特別なアプローチが必要になってくる。

翻訳者はレアリアや固有名詞の翻訳法を選ぶ際、恐らく矛盾する様々な意図に影響されていたと考えられる。ロシアの読者の期待にも合わせ、日本の民族の特色を伝えるため、転写の方法を選ぶ場合がある一方で、読みづらく、分かりづらい言葉の連続を避け、記述的な翻訳、より一般的な意味を持つ言葉への置き換え、あるいは省略を行っている。

2. 登場人物の言葉の文体は地の文の文体と異なり、しかも人物によって、その発言の文体、表現力の特徴が多様である。翻訳者はその特徴を現すためにどういった手段を使って、どういった効果が生まれたのか検討した。

男性と女性の言葉、話し方の特徴は、ロシア語には日本語と異なって特別な手段がないため、翻訳では失われていると言える。一方、情動的なニュアンスが伝わっている。

方言の翻訳法の問題。主人公、その父親、母親は関西弁で話をしている。方言の伝え方は不可能だが、機能的な代用が可能である。翻訳者は標準語と異なった俗語、口語を使い、そして必要な雰囲気、イントネーションをある程度伝えることができる。

3. 比喩の翻訳法。ロシア語文法の特徴や語句の結合力によって直訳できない場合には、翻訳者が比喩の解釈をし、その表現力を伝えるため、ロシア語の別の手段を使う。

比喩の中においてもレアリアが登場する場合は特別な文体的な機能をもって形象を編み出すための手段という場合においてのみである。訳文ではロシアでよく知られた概念を表す言葉を使う傾向がある。

翻訳者は語句を直訳しているのではなく、比喩の表現力と芸術的な効果を再現しようとして、ロシア語の性格に従って、ロシア人の読者が納得するような比喩を創造している。比喩を中立的な表現で訳さざるを得ないところも少しは見られたが、多くの場合は比喩的な表現は比喩的な表現で訳し、形象性を再現している。

【B24】戦争文学における女性兵士像について
—「大祖国戦争」文学の中・短編から—

佐藤 亮太郎

「大祖国戦争」を題材とする文学作品は、作家からすれば、戦争体験の位置付けと自己認識へ向けた問いの表現手段であり、読者から見れば、「戦争」という全国民共通でありかつ各人各様の体験を、文学を通して共有していくメディアであるという二面的な役割を担った。「大祖国戦争」をめぐる言説は、小説をはじめとする言語・映像・報道メディアと検閲の相互作用、及びアネクドートや口伝等を介して「戦争神話」を形成してきた。「大祖国戦争」文学作品もまた、作家個人の自己表現を拡大し、戦争に関する様々な事象を文学上のテーマとして世に送り出す、いわば「表現の自由」への挑戦の舞台となったと同時に、国民に広く共有される「戦争神話」の形成力の一つでもあった。ソ連の「戦争カルト」を研究したニーナ・トゥマルキンは「この伝説の基本プロットは後付けのメシアニズム」であり、それが「増加するシニカルで無気力な大衆を活気付けるための、モラルの実例を供給」し、「戦争崇拜が年長の元兵士の自尊心を支え、うんざりし幻滅した階級のためのノスタルジアの源泉を提供し、世代間の不協和を父親有利に解決するのを助けた」と指摘する。

本論では「大祖国戦争」文学の担い手であった男性作家の作品に登場する女性兵士像に着目する。X.Gasiorowska の著書 *Women in Soviet Fiction, 1917-1964* では、第二次世界大戦を題材としたソビエト小説の中での女性兵士像の主要な特徴として、女性の優しさと戦争の流血とのコントラストによって女性性(Femininity)が強調されたと指摘するが、本論では、男性作家にとって異性の「他者」である女性性の強調のあり方、そして創作上の「作り物」である登場人物の女性兵士と、男性作家が自己投影させる男性登場人物との関わり方を考察し、男性作家のまなざしから生まれた女性兵士像を通して「大祖国戦争」文学ないしは「戦争神話」に託された男性作家達の願望や態度を明らかにする。対象として今回は、コジェーブニコフ『三月—四月』(1942)、Э.カザケーヴィチ『星』(1947)、『オーデルの春』(1949)、Б.オクジャワ『少年兵よ、達者で！』(1962)、Б.ヴァシリエフ『ここの朝焼けは静か』(1969)、『お古のオリンピア』(1975)、『ベテラン』(1976)、『燃え尽きない草叢』(1985)を取り上げる。

(さとう りょうたろう、北海道大学 大学院生)

【B25】カシャーン・ゴレイゾーフスキーのアヴァンギャルド・バレエ『竜巻』を中心に—

村山 久美子

ゴレイゾーフスキーのアヴァンギャルド・バレエの研究として、昨年本学会で報告した 1925 年初演バレエ『美しきヨセフ』に続いて、今回は、1927 年にモスクワのポリショイ劇場支部「実験劇場」で、リハーサルとして上演され、すぐに消えてしまったバレエ『竜巻』を中心に取り上げる。

『竜巻』は、アカデミー劇場での革命をテーマとした最初のバレエの一つである。ここには、上下する台の構成主義舞台美術、投光器の駆使、突然の休止などの作品の流れやリズムの激変等々、それ以前までのエストラダでのゴレイゾーフスキーの、メイエルホリドほかのアヴァンギャルドの芸術家とのコラボレーションによる作品の痕跡が見られる。

また、この作品の注目すべき点は、階級闘争をテーマとしたと明言しているとはいえ、「時代や場所を限定せず」、「登場人物も、“労働者階級”の代わりに“抗議(プロテスト)”，“X国の皇帝”ではなく“帝政のエムブレム”とする」と、ゴレイゾーフスキーがプログラムに書いていることである。このような登場人物の行動となる内容も、労働者階級の抗議は、支配者階級の見ると具体性のない幻覚として現れるなど、全体としてシンボリック、抽象的かつ心理的表現に徹し、同時代を描くことを避けていたことがうかがわれる。革命後の新しいバレエを求める観客の要求に、アカデミー劇場が応えるために企画制作された作品であったにもかかわらず、ゴレイゾーフスキーがこのような表現をとった真意は何だったのだろうか。

本報告では、『竜巻』とこの作品にいたるまでのゴレイゾーフスキーの実験を分析しながら、ダンスのアヴァンギャルド運動の旗手としてのゴレイゾーフスキーの様々な実験を検討し、かつ、1920 年代のアカデミー・バレエ劇場が抱えていた問題、伝統的バレエの方向性の模索について考究したい。

(むらやま くみこ, 早稲田大学)

【B26】バフチンに抗うトゥイニャーノフ「パロディ」を介して

八木 君人

本発表では、I.O. トゥイニャーノフと M. バフチンにおける「パロディ」の概念を比較することにより、「文学史」の問題を考察します(それ故、広汎な射程をもつパロディー一般の問題については言及しません)。この問題機制はいうまでもなく、トゥイニャーノフに則したものです。トゥイニャーノフは、「パロディの歴史は、非常に緊密なかたちで文学のエボリューションに結びついている」と述べています。初めて出版された彼の論文が「ドストエフスキイとゴゴリーパロディの理論に寄せて」(1921)であり、最後の理論的な著作となったのが、当時、陽の目を見ることのなかった「パロディについて」(1929)でした。その点で、「パロディ」を軸にトゥイニャーノフの文学(研究)観の変遷を探るのも面白いでしょう。しかし、われわれが注目すべきは、オポヤズの面々が社会学=歴史の問題に直面していたこの時期に、トゥイニャーノフが「パロディ」を直接的に論じている事実です。

一方、周知の通り、バフチンにおいても「パロディ」の問題は前景化しています。彼はそれを、(結局は一つだといえるかもしれませんが)二つの系において考えているといえるでしょう。その二つとは、『ドストエフスキイ創作の諸問題』において、のちに「メタ言語学」と名付けられる視点から考察された「ダイアログ」と、『ドストエフスキイ詩学の諸問題』やいわゆる『ラブレール論』において提起される「カーニバル」です。

「ダイアログ」という点では、トゥイニャーノフ「ドストエフスキイとゴゴリ」における「パロディ」と比較することが可能でしょう。しかし、「カーニバル」という点ではもちろん、トゥイニャーノフにそのような問題意識を見出すのは困難であり、直接的に比較することはできません。そこでわれわれが行うべきは、メドヴェージェフ/バフチンが批判したトゥイニャーノフの「文学史」における「交替」と、カーニバルにおける「交替」とを比較することです。それは、「時」あるいは「歴史」を介して両者の「パロディ」を比較することとなります。結論として、バフチンの「未来を孕む交替(=史的唯物論)」に抗するトゥイニャーノフの、「差異」を媒介にした「文学の時間」を提示します。

(やぎ なおと, 早稲田大学 大学院生)

【B27】 シクロフスキーにおける再認の概念

野中 進

フォルマリストとしてのシクロフスキーは「新しさ」の価値を特権視した。規範を破壊するためには規範の働きが予め感じられていなくてはならない。だがシクロフスキーは「規範の破壊者」たらんとして、あえて「規範の遵守」ではなく「規範の破壊」について語った。そこから彼独特の理論的両義性が生じてくる。

『言葉の復活』と『手法としての芸術』で「直視 видение / 再認 узнавание」について述べられている箇所を再読しよう。直視は詩的言語の方法であり、再認は実用言語のそれであるというテーゼが価値評価的な性格をもつことは明らかだ。だが一方、シクロフスキーの議論を細かく追っていけば、再認なしに直視はありえないこと、最初に直視があつてそれが再認へと「自動化」（これまた否定的なコノテーションを負わされた概念だ）するという図式は多かれ少なかれ「虚構」であることが分かる。そしてそのことを彼自身が理解していなかったはずはないということも推察されるのである。

直視と再認、異化と自動化、詩的言語と実用言語、などの「シクロフスキー的二項対立」が含みもつ二重性の実相をよりくわしく見るためにわれわれは、(A)1920年代に彼が同時代の作家について書いたエッセー、そして(B)1960年代以降の著作、とくに理論的性格の強いもの、の二つのテキスト群を取り上げた。

(A)においては、文芸批評の実践においても「シクロフスキー的二項対立」の理論的両義性がその姿を現しているさまを確認することができる。また(B)においては、シクロフスキーがフォルマリズムの諸概念を再検討に付している点、とりわけ「再認」についての議論が重要である。そこで彼はフォルマリスト時代の「シクロフスキー的二項対立」を解体し、それに代わる新たな「再認」論—それは同時に「定型」と「反復」についての論でもあるのだが—を展開している。たしかに、純理論的に見れば、彼がしているのは1920年代前半のトニャーノフの議論の反復にすぎないかもしれない。だが、かたちのうえでは同じものがくり返されているときでもその意味(機能)は異なる、という彼ら自身の主張に頼ってよいなら、晩年のシクロフスキーのあいかわらず冗長でやや悟りがかった議論は、1920年代のトニャーノフたちのそれとはやはり違うものである。その差を過大評価する必要はないが、過小評価するのも当たらない。われわれはそれを文学的モダニズムの自己検証の一例として見るべきであろう。

(のなか すすむ、埼玉大学)

【B28】 文学論争としての文学の商業化

—литература と словесность—

近藤 大介

ベリンスキーは、生前には発表されず未完にとどまった『литература という言葉の一般的意義』という草稿論文を残している。1840年代前半に書かれたと考えられるこの論文は、当時すでに大きな影響力をもっていた批評家ベリンスキーによるロシア文学の再定義という性格を持っている点で大変興味深い。そこでベリンスキーは、「文学」を意味する言葉<литература>と<словесность>を取り上げその差異を論じて、国民精神の発展が刻印されたものとして、<литература>に世俗的な「近代文学」の意味を与えている。ただし、ここで示された文学観それ自体は革新的なものではない。ベリンスキーがプーシキンまでのロシア文学を総括し、そこからあらためてロシア文学の舵取りを始めたことは周知の通りだが、そのような彼の批評家としての革新性ばかりが論じられるためか、彼の批評活動がつねに文学史の連続性に立脚していることには、あまり注意が払われていない。しかしこの点に注目するならば、未完の論文『литература という言葉の一般的意義』にも、それに先行する多数のテキストの存在が見えてくる。ベリンスキーは、先人たちの声に応答し、時に議論を交わしながらも、先人たちの遺産を引き継いだのだが、視点を変えれば、先行する文学状況がベリンスキーをロシア文学の再定義へと導いたのである。

上記の論文でベリンスキーは、「近代文学」である<литература>という言葉はつねに出版と結びついていると指摘している。このことからある特定の間では、<литература>が職業作家や営利活動を目的とした文学メディアの携わる商業的文学を指す場合もあると考えられる。その特定の間が、まさに本発表が対象とする、文学の商業化である。1820年代から30年代にかけてロシアでは、『読書文庫』に代表される、文学の商業化を標榜する定期行物が現れるが、一方では商業的文学活動を忌避する作家も存在したため、文学の商業化の是非をめぐる文学論争が激しく展開された。この論争は職業的文学とサロン文学の対立であるが、同時に<литература>と<словесность>の対立として捉え直すこともできる。つまりこの論争は、「文学」を指し示す言葉が分化していく重要な契機であり、またこれによって後にベリンスキーが定義を下す「近代文学」の概念形成を促した点でも、ロシア文学史上で大きな意味を持っているのである。

(こんどう だいすけ、一橋大学 大学院生)

【C29】映画『トゥルクシブ』における煽動性の機能について

佐藤 千登勢

映画『トゥルクシブ』（トゥーリン監督、1929）は、トゥルクスタンとシベリアを結ぶトゥルクシブ鉄道建設のさなかに、労働者の意欲を高め、一致団結させることを目的に制作、公開された。だが、この作品には、プロパガンダ映画に特徴的な「群衆、抑圧者と被抑圧者の闘争、革命の図式」といった要素は欠如しており、美しい自然や産業の営み、鉄道建設の過程のファクトの素材が対置され編集されているばかりだ。

事実、この作品は、革命の描き方が弱いという理由で、1936年、当局により批判を受けている。にもかかわらず、最初の観客となった労働者たちは深く感動し、予定より半年も早く鉄道を完成させた—それほどの煽動力の強度を有していた。その煽動力を支える要素とは何だったのか。その要因として次の3点を挙げたい。

①詩的要素：この映像の中でドミナントとなっている自然や機械の美は、類似する形状や運動によって詩的（隠喩的）イメージの連鎖を創造し、反復されることで視覚的リズムを形成する。映画におけるイメージ創造の方法はクローズ・アップによる提喩が一般的だが、『トゥルクシブ』のイメージ体系は隠喩的方法に支えられている。このことはドキュメンタリー映画に詩的な要素を与え、同時に崇高の感覚を創造する。

②埋め込まれる煽動的記号：1918年頃から1930年代初めにかけて機能した煽動列車、政治的煽動ポスターなどの媒体により、当時、文盲の国民をも反射的に理解に至らしめ煽動するソヴィエト語のような記号（アイコン）が形成されていた。トゥーリンは、無批判に受け入れがちな日常的ファクトの集積を、この煽動的記号の数々から成立させている。これらの記号は、無防備な知覚に、穏やかに、そして潜在的に浸透する。

③「スクリーン＝鏡像」への同一化：観客自身をスクリーンに映し出し、スクリーンを、文字通り鏡像に変えることで、同一化のための障壁を完全に取り除き、観客を共感させ煽動する力を絶対的なものにした。労働者たちはこの鏡像への同一化を通して、さらに英雄としての自我を再形成していくことになる。

闘争や暴力による煽動性を特徴とした同時代の煽動劇映画とは異なり、『トゥルクシブ』の煽動性は、暴力とルサンチマンを排除し、作品の詩的要素によって獲得される崇高、煽動的記号に対する無批判で無自覚な受容態度、観客のナルシズムの拡張に依拠する。これを、暴力的煽動に対して、宗教的煽動と呼びたい。

（さとう ちとせ、慶応義塾大学）

【C30】ディアギレフと画家達—バレエ・リュスのユニヴァーサルティについて

平野 恵美子

バレエ・リュスが1909年にパリで初公演を行って以来、「プリミティヴ」「エキゾチック」という言葉が、バレエ・リュスの代名詞となった。だがその作品の題材は西欧風なものから、古代ギリシア、エジプト、アラブ世界、アジア等、実に多様だった。こうした主題の中には軽薄で19世紀オリエンタル趣味的な作品もあるが、振付家のミハイル・フォーキンや画家のバクストらは、ジャンル・ヌーヴォーと呼ばれるヨーロッパの新しい植民地であるアジアの芸術を熱心に研究し、自分達の芸術に真摯に取り入れようとした。

1899年、ディアギレフは『芸術世界』誌の創刊号および第3-4号合併号に“Сложные Вопросы”という論文を掲載した。ロシア美術における象徴派のマニフェストといえるこの宣言は、「芸術世界」グループ全体の芸術観を表している。この中でディアギレフは、ロシア芸術におけるロシア的なものの表出について、「わざと典型的なロシア風のものを入れたロシア芸術は偽者の民族芸術であり、本当のロシア芸術は血の中に自然に流れている」と述べている。またタタール（=アジア）の血は既にロシア芸術の一部であることを認めている。

こうした考えは、約10年後のパリで公演が行われたバレエ・リュスの作品では、どのように表わされたのだろうか？ バレエ・リュスの「ロシア的」なバレエ「火の鳥」（1910）を見ると、“Сложные Вопросы”で否定されたわざとらしい「ロシア的」なモチーフの導入は否定できないものの、バクストのデザインにおいてその原型は「黄金（=非常に東洋的なイメージと結びつく）の鳥」や「ヒンドゥーの王子」であるなど、そこには東洋的なイメージが濃厚にあった。また Sally Banerjee も、“Firebird and the Idea of Russianness”（1999）の中で、火の鳥にアジア女性的な要素が大変強い事を主張している。

このように非常に「ロシア的」に見えるバレエでさえ、そこには東と西の文化の融合が見られる。バレエ・リュスの「ロシア的」要素が何であったのか考える時、それは西歐的でもあり、東洋的でもある。そしてこれを折衷と呼ぶよりも、どちらでもない、あるいはどちらの要素も含む、ユニヴァーサルなアイデンティティーであったと考えるべきではないだろうか。

（ひらの えみこ、東京大学 大学院生）

【C31】 モンタージュからデジタル・メディアへ—情報社会におけるロシア・アヴァンギャルドの再評価—

江村 公

本発表のタイトルにある「情報化社会」とは、脱工業化社会を前提としている。確かに、ロシア・アヴァンギャルドの時代は、近代的工業化社会の実現を目指していた。当時のテクノロジーに関する議論は、具体的には全国の電化やマス・コミュニケーションの問題が中心である。しかし、当時の芸術の生産プロセスとテクノロジーをめぐる議論は、現在の情報化社会の基盤を準備したともいえる。近年の論考は、現代の情報化社会を考える上で、その先駆性を積極的に評価しているものもある。こうした議論を踏まえながら、本発表では、ロシア・アヴァンギャルディストによる社会・テクノロジー・芸術に関する実践的な試みを、その失敗をも含めてあきらかにする。

当時の芸術とテクノロジーをめぐる議論は、狭義の意味での視覚メディアの技法(例えば、写真や映画におけるモンタージュ)だけにとどまらない。本発表では、「ヒューマン・インターフェイス」、つまり、機械と人間とのアレンジメントを組織する枠組みを中心的課題としたい。そのために、以下の点に焦点を絞って、議論を進める。

第一に、1920年代、構成主義が生産主義へと変容する舞台となったインフク(芸術文化研究所)での議論を手がかりに、芸術とテクノロジーを結ぶ理論的背景を考察する。インフクでは、芸術創造を生産プロセス(労働)に組み込むことが模索されていた。第二に、「ヒューマン・インターフェイス」の具体的な表象として、リシツキイによるフォト・モンタージュを取り上げる。リシツキイによるコンパスを持った手の表象、あるいは制作するタトリンの形象は、すでにさまざまな研究で議論されているが、ここでは主に機械による身体機能の拡張という点から考察する。また、リシツキイの試みは、エックス線による映像という視覚情報の新しい伝達方法の模索とも並行している。第三に、「ヒューマン・インターフェイス」の出現は、人間の身体的・精神的労働のあり方を変えたことを指摘する。例えば、人間の視覚プロセスを機械が肩代わりすることで、視覚情報を処理する速度と正確さは飛躍的に向上した。しかし、こうした視覚のオートメーション化は、「監視」という労働形式の出現とも不可分なのである。

以上の考察から、ロシア・アヴァンギャルドの議論は、現在の情報化社会の両面価値を考える手がかりになるといえる。

(えむら きみ)

【C32】 グリゴリー・チュフライ研究—人物像を中心に
前田 恵

本報告では、Григорий Чухрай(1921-2001)監督作品の作品分析のひとつとして、登場人物について考察した。まず、それぞれの人物が物語において担わされている役割を省察し、次にそれらの人物がどのように形成されているかを明らかにする。これは物語的側面、および、叙述・表現形式の二側面から考察するものである。さらに、登場人物のあり方を決定する上で、監督であるチュフライの人間性がどのように関わっているかを明らかにする。

映画は、極論すれば、出来事とその出来事に関わる人物を交錯させることによって創造されていると言えるだろう。そして、それは、大別すれば、出来事に比重を置くか、あるいは、これに接触する登場人物を中心として描くかの、ふたつに分けることができるだろう。

1956年から1979年までにチュフライが監督した物語作品では、「人物」を具象するために出来事が構成されていると考えられる。さらに、この傾向は3本のドキュメンタリー作品においても認められる。例えば、監督自らが戦場に立った、スターリングラード攻防戦を振り返る『記憶』Память(1969)においても、戦争そのものが題材とはならず、これに人々がどのような姿勢で接していたかを語っている。また、「時代を反映した人物像はチュフライ作品の特徴である」という論評は、「人物」に焦点を当てたチュフライ監督作品を象徴し、その人物像形成の確かさを浮き彫りにしている。その中で、1961年に発表された『晴れた空』Чистое небоで提示された人物像には批判が集まっている。その理由として、ある登場人物に対する批判的視点があげられている。この指摘そのものは短絡的であるとしても、チュフライ監督作品の登場人物の中では「異種」的な、「役割性」の薄さが、『晴れた空』の人物像の問題点であることは指摘できる。報告では、以上に述べたことを端緒として、人物像に関わる問題を多面的に考察した。これにより、例えば、登場回数と反比例する高い「役割性」を担う登場人物の表象の仕方など、チュフライ監督作品の特徴的なものが明らかになった。

報告では、チュフライ監督作品を支える登場人物のあり方、および、チュフライが、なぜ、人物像にこだわったのかを中心に検討する。

(まえだ めぐみ、大阪大学 大学院生)

【C33】モスクワのミュージカル

森田 まり子

ロシアに限らず、イギリスを除くヨーロッパでは、ミュージカルという舞台ジャンルはこれまであまり受け入れられてこなかった。しかし 1990 年代に入って、フランス語圏やドイツ語圏などでオリジナル作品が次々と上演されはじめ、英語圏のミュージカルもヨーロッパ各地でロングラン公演が行われ、ミュージカルはヨーロッパのサブ・カルチャーを担う存在になってきた。その代表が日本でもおなじみのウィーンで初演されたミュージカル《エリザベート》やフランスで初演されたミュージカル《ノートル・ダム・ド・パリ》である。ロシアでは 1990 年代に入るまで、形式面でミュージカル的な構成をもつ舞台は各劇場のレパートリーのひとつとして上演されていたが、ロングラン(1 つの演目と同じ劇場で長期連続公演することによって、巨額の製作資金を回収し利益を得るシステム)を前提としたミュージカルが上演されたのは 1999 年にモスクワで初演された《メトロ》が初めてであった。このような文脈の中で、フランスの人気ミュージカル《ノートル・ダム・ド・パリ》のロシア・バージョンが 2002 年に初演されたのを皮切りに、モスクワでもミュージカル・ブームが起こった。同時期には劇場占拠テロ事件のあった《ノルド・オスト》も上演されており、初のロシア・オリジナル・ミュージカルとして注目を集めたほか、ブロードウェイ・ミュージカル《42nd Street》や《シカゴ》もモスクワで上演されていた。現在ミュージカルはロシア語で мюзикл と呼ばれ、新しい舞台ジャンルとして認識されはじめている。しかしモスクワではヒットする作品とそうでない作品の落差が激しく、いまだに舞台の一ジャンルとしての地位を確立するには至っていない。コメディ路線のブロードウェイ・ミュージカルよりも、アンドリュー・ロイド・ウェバーの作品によくみられる歌でシリアスなドラマを綴っていく形式をとるロンドン・ミュージカルやフランス語圏のミュージカルのほうが好まれるというのが現在のモスクワで受容されているミュージカルの特徴といえよう。

(もりた まりこ, 早稲田大学 大学院生)

【C34】はたして相手の言うことはわかったか

—ラクスマン来航時の日露交渉過程—

有泉 和子

寛政四年(1792)来航のラクスマン使節との交渉の実際の有様を日露両国の史料をもとに考える。

松平定信を首班とする幕府は、既に貿易許可をも視野に入れ、内々では使節にその意向を洩らしており、また使節の主文書であるピーリ書翰を表向きは受け取りを拒否しながら、「読み上げるなら聞く」との柔軟な態度を示し、さらに出航八日前、将軍と直話ができる強力な地位、目付の配下である徒歩目付・小人目付の後藤重次郎、富山元十郎両人が、こちらから要求して、密かに写しを受け取っている。

これら日本の態度をロシア側がどのように理解したかを前提に、両国の意思の疎通はどの程度なされたはずのものなのか、そもそも何語であったのか、通訳・翻訳の問題も含め検討する。

立証に使用する主な史料は次のようなものになる。

・ラクスマン航海日誌(Журнал Адама Лаксмана ЦГАДА. Ф.1261 Воронцовых, оп.1, д.2891, лл.1-64)

・交渉の詳細を細述する日本側一級史料、定信の『魯西亜人取扱手留』(東京大学史料編纂所蔵)

・幕府天文方・高橋景保の手付けで、天文方蠻書和解御用の事実上の中心、蘭語通詞・馬場貞由の光太夫のロシア語力に対する評価を示す『辛未魯西亜書簡和解』(明治大学図書館所蔵『北邊紀聞』内)

・レザノフ使節のナジェジダ号乗艦ラフマトフ大尉の航海日誌に記され、ラクスマン使節の根室越冬時にロシア語を学んだ加藤肩吾、田辺安蔵と思われる日本人二名の実際の実力(Российско-Американская компания и изучение Тихоокеанского Севера, 1799-1815. Сборник Документов. М., 1994. [№74]; 天理大学図書館所蔵・松平樂亭文庫旧蔵・田辺安蔵『魯西亜語類』; Головин В.М. Записки флота капитана Головина о приключениях его в плену у японцев в 1811, 1812 и 1813 годах с приобщением замечаний его о японском государстве и народе. Хабаровск, 1972)

・意味不明で理解不可能と幕府により無視されつき返されたラクスマン書翰の日本語訳、原文とは全く意味の違うその不正確さ(国立歴史民俗博物館所蔵平田篤胤関係文書冊子七十七; Российско-Американская компания... [№112]. РГАВМФ Ф.198, оп.1, д.79, л.4)

・日本の正式通達書、論書の翻訳過程を記し、我国の状況と要求を伝えようと苦心惨憺する有様を実況した『魯西亜人舶来一件』(国立公文書館内閣文庫所蔵)等

(ありいずみ かずこ, 東京大学史料編纂所)

【C35】18 世紀後半におけるロシア貴族のヨーロッパ修学旅行—パーヴェル・アレクサンドロヴィチ・ストローガノフの事例を中心に—

小野寺 歌子

18 世紀は、ヨーロッパの一边境国にすぎなかったロシアが大国へと変貌を遂げた時代だった。その背景には、ロシアの政治や軍事、文化を担った貴族が受けたヨーロッパ的教育体験がある。とりわけ貴族上層では、子どもの教育がヨーロッパ諸言語を母語とする外国人教師によって担われ、またヨーロッパへの修学旅行もしばしば行われた。

18 世紀をつうじて、ロシア貴族のヨーロッパ旅行は大きく変容している。ピョートル大帝時代は、成人した貴族が専門的な技術や知識を獲得するためにヨーロッパへ強制的に派遣された。エカテリーナ二世時代には、修学旅行が子どもの教育の一環として行われ、ヨーロッパでの教養や文化の涵養が目指された。ところで 18 世紀、ヨーロッパの貴族とくにイギリス貴族の間には、学業を仕上げるために行う「グランド・ツアー」の慣行があった。すなわちフランスやイタリアの主要都市に滞在し、外国語とくにフランス語を学び、イタリア芸術やオペラ、建築などルネッサンスの遺産に触れた。ヨーロッパ貴族間の交流も重要な課題とされた。いわば「グランド・ツアー」はヨーロッパ上流階級の一員となるための通過儀礼であった。ロシア貴族のヨーロッパ修学旅行はその内容と目的において「グランド・ツアー」と多くの共通点をもつ。

本報告では、エカテリーナ時代の事例として P. A. ストローガノフ(1772-1817)の旅行を取り上げた。ストローガノフの旅行は、ヨーロッパ的教養の習得や社交界での交流を主たる課題とした。とくに、ウラルに広大な鉱山や冶金工場、製塩所を所有するストローガノフ家の家督相続者に求められた、多様な自然科学にかんする専門的高等教育や父親からの人脈の継承に重点が置かれた。一方で「グランド・ツアー」との相違点は、ロシア貴族の常識として旅行前にフランス語教育を終え、旅行に必要な語学力を備えていた点や、教育責任者である父親が息子のヨーロッパ滞在中にロシア語やロシアの地理・歴史の学習を義務付け、愛国心を培うことに心を砕いていた点である。

ロシア貴族にとってヨーロッパ修学旅行は、ヨーロッパ先進地域の文化を獲得し、国際的視野や時代感覚を培う場であるとともに、祖国の文化を改めて見直す機会を与え、ロシア貴族エリートとしての自覚を呼び起こす場であることも理想とされたのである。

(おのぞら うたこ、京都大学 大学院生)

【C36】ダーシコヴァと『ロシア・アカデミー辞典』編纂の社会的意義

中神 美砂

18 世紀末のロシアでは、国家制度の整備や教育改革が進み、多くの知識人は、西欧の一員であることを意識し始めると同時に、民族意識の覚醒が不可欠であることを強く感じていた。西欧での体験を礎にロシア・アカデミー総裁となったダーシコヴァは、啓蒙思想の普及に努めると共に、ロシアの独自性を確保する手段としてロシア語の重要性を主張した。ダーシコヴァは、読書や西欧旅行を通じて、個の確立と民族的自覚の基礎を形成するのは母国語であるとの信念をもつに至り、言葉に対する持ち前の優れたセンスを活かして、ロシア文化の発展に不可欠な辞典の編纂に取り組むことになる。

ダーシコヴァ総裁の優れた指導力の下、『ロシア・アカデミー辞典』の編纂は、わずか 11 年で終了し、収録語彙は 43,257 語に及んだ。ただし、辞典編纂のプロセスでは、貴族階級に特徴的な西欧文化の模倣やロシアの文化・言語に対する軽視といった現実が、語根方式辞典か、アルファベット順の辞典か、外国語、専門用語、方言などの収録語彙の選択をどうするかといった、具体的な編集方針をめぐる論争の形をとって現われた。

にもかかわらず、短期間で出版にこぎつけたのは、この辞典が、フォンヴィージンやデルジャーヴィンなどの作家、学者、聖職者など一流の知識人の共同作業によって編まれたためであった。また、ロシアの文化と言語を尊重するロシア人の育成と国民意識高揚が根底にあったことも注目すべき重要な点である。その一例が、語彙の説明にロシアの年代記、ロモノーソフなどの 18 世紀の作家の作品などが使用されていることである。そのため、『ロシア・アカデミー辞典』は、ロシアの文化にとって永遠の記念碑として残る」と指摘したプーシキンやベリンスキーなど 19 世紀の文化人からも高い評価を得ることができた。

カラムジンは、「アカデミーが編纂した辞書は、外国人を驚かすロシア的現象の一つである。…私達は百年単位ではなく、十年単位で成熟している」と述べた。辞典編纂は、ロシアの発展の可能性と精神基盤を信じ、西欧に対してロシアの文化レベルを示す試みだったと考えられる。『ロシア・アカデミー辞典』はまた、18 世紀末のロシア文化の著しい進歩を示す一つの重要な証であり、19 世紀につながる国民意識の覚醒を促すうえで、この上なく重要な啓蒙書としての役割を果たしたといえる。

(なかがみ みさ、東京外国語大学 大学院生)

【C37】ドストエフスキーとロシアにおける火事のイメージ

越野 剛

ドストエフスキーにおける火事のイメージの複雑な両義性と文化史的背景を明らかにしたい。小説『悪霊』(1871)のクライマックスで描かれる火事は、1862年にペテルブルグで起きた連続放火事件を念頭に置いていることはよく知られている。社会秩序の転覆を図る革命派の「悪鬼ども」の放つ地獄の火、社会悪の象徴としての火事のイメージが読みとれる一方で、登場人物の一人レンプケの「燃えているのは人々の頭の中だ」という台詞にあるように、人間の内面の悪、病気のイメージともそれは結びついている。後者はドストエフスキーの持病であるてんかんとも無関係ではない。本発表では『悪霊』の火事の他に以下の2点について着目したい。

1812年のモスクワの大火は、19世紀ロシアの文化史の中で大きな意義をもつ。民衆による愛国的な放火とナポレオンの敗北という歴史神話的モチーフが、ザゴスキンの『ロスラヴレフ、あるいは1812年のロシア人』(1830)からダニレフスキーの『焼かれたモスクワ』(1886)にいたる歴史小説の系譜の中でどのように変遷してきたかを明らかにし、ドストエフスキーの『プロハルチン氏』(1846)に描かれる火事の場面をそうした文学史的コンテキストの中に置いて分析する。その際にはナポレオンと民衆(ナロード)のイメージに着目する。ドストエフスキーの作品世界において、こうした火事のイメージはナポレオンの敗北に象徴される「傲慢な強者の悔い改め」のモチーフに関連させることができる。

父親の虐待を受けた少女が家屋敷に火を放ったウメツカヤ裁判(1867)はドストエフスキーの強い関心を誘い、『白痴』(1868)の女主人公ナスターシャの形象の源泉のひとつとなった。一方で農奴解放以降のロシアでは、新聞メディアの発達とも結びつきながら、農村に多発する放火は嫉妬と復讐心に動かされやすい女性に特徴的な犯罪であるとするステレオタイプな言説が現れるようになる。ドストエフスキーの作品においては、こうした火事のイメージは弱者(女性・子供・農民・ナロード)の強者(男性・父親・貴族・ツァーリ)に対するプロテストというモチーフに結びついている。

(こしの ぎょう, 日本学術振興会特別研究員)

【C38】

В.Я. Ерошенко и язык эсперанто: известность и забвение

Аникеев С.И.

Василий Яковлевич Ерошенко родился 12 января 1890 г. в деревне Обуховка в зажиточной крестьянской семье. В 4 года из-за болезни ослеп. Но у него был отличный музыкальный слух, и родители стали обучать его музыке. С 9 лет его определили в 1-ю Московскую школу слепых.

После окончания школы в 1908 г. В. Ерошенко был принят в оркестр слепых музыкантов в Москве. Здесь он знакомится с Анной Шараповой. Обратив внимание на его музыкальные способности, она посоветовала В. Ерошенко продолжить музыкальное образование в Англии и убедила его заняться изучением эсперанто, чтобы ускорить поездку в Лондон.

Изучив эсперанто, В. Ерошенко в 1912 г. едет в Англию. «Да, сейчас я могу сказать, что лампа Алладина не могла бы помочь больше, чем зеленая звездочка эсперантистов; я уверен, что никакой джинн арабских сказок не смог бы сделать для меня больше, чем гений реальной жизни доктор Заменгоф, творец эсперанто» — писал он после возвращения из Англии в эсперантистском журнале.

В 1914 г. В. Ерошенко прибыл в Японию, рассчитывая и здесь на помощь эсперанто. Хотя, кроме этого, он прилично владел английским языком.

В. Ерошенко был принят в Токийскую школу слепых. За год-полтора он освоил японский язык и публикует свои первые рассказы.

С 1916 по 1919 гг. В. Ерошенко в Юго-Восточной Азии. Вернувшись в Японию, он серьезно увлекается сочинительством на японском языке, принимает активное участие в общественной жизни. Имя В. Ерошенко становится известным и популярным среди японской интеллигенции и молодежи, а писательская деятельность приносит ему имя «слепого русского поэта».

Но из-за активной деятельности его подозревают в распространении идей анархизма и большевизма, и в июне 1921 г. В. Ерошенко высылают из Японии. А в сентябре друзья узнают, что он уже в Китае.

Не задерживаясь долго в Харбине, В. Ерошенко перебирается в Шанхай, а затем в Пекин, где продолжает сочинять на эсперанто и японском. Лу Синь и его брат Чжоу Цзо-жень первыми стали знакомить китайских читателей с его произведениями, переводя их на китайский язык.

Оставив после себя в Японии три сборника своих сочинений на японском и пять сборников на китайском языке в Китае, В. Ерошенко вернулся в 1924 году на родину. Здесь он с болью осознает, что эсперанто в советской России опасное занятие: эсперантские учреждения закрыты, активисты арестованы как шпионы и предатели. А на русском он ничего примечательного так и не написал до самой смерти в 1952 г. В России имя В. Ерошенко было забыто вплоть до 60-х гг.

Отличие в отношении к эсперанто в странах Запада и Востока очень точно определил генеральный секретарь Лиги Наций Нитобэ Инадзо в 1924 г.: «Эсперанто может встретить какие угодно предрассудки и враждебность в Европе, но на Дальнем Востоке он был воспринят с открытой душой».

(Сергей·Аникеев, Россия極東大学函館校)

【C39】

Лингвострановедческий видеокурс «Российские телевизионные новости — окно в русский мир»

Орлянская Т.Г.

Актуальность вопросов взаимодействия языка и культуры в последнее время приобрела особое значение по целому ряду причин. Глобализация, миграция народов, исчезновение ряда государственных границ и осознание важности диалога культур привели к качественным изменениям и в преподавании иностранных языков.

В настоящее время всё большее значение приобретает комплексное преподавание языка и культуры, иными словами, языка и мира носителей изучаемого языка: их образа жизни и национального характера, принятой в данном культурно-языковом сообществе системы ценностей и традиций. Соизучение языка и культуры является одним из современных направлений в теории и практике преподавания иностранного языка.

По определению отцов российского лингвострановедения Е.М. Верещагина и В.Г. Костомарова, «лингвострановедение представляет собой самостоятельный аспект в преподавании иностранного языка», а «соединение в учебном процессе языка и сведений из сфер национальной культуры называется лингвострановедческим преподаванием».

Применимо к преподаванию русского языка как иностранного в японской аудитории можно сказать, что актуальность лингвострановедческих курсов в настоящее время имеет особое значение в виду значительно меньшей информированности японских учащихся по вопросам России, чем, например, по вопросам США или Китая.

В 2003 году я имела честь выступить на конференции ЯАПРЯЛ в Осака с докладом «Русский мир как страноведческая дисциплина». Этот аудиовизуальный курс лекций уже 6-й год читается мною в Хоккайдском университете. Однако, исходя из необходимости информирования учащихся и большего насыщения учебного процесса национально-культурной спецификой, мною был разработан новый лингвострановедческий видеокурс «Российские телевизионные новости — окно в русский мир».

В качестве учебного материала курса были выбраны телевизионные, аутентичные, неадаптированные репортажи информационной программы «Время».

Предлагаемая модель лингвострановедческого видеокурса «Российские телевизионные новости — окно в русский мир» призвана показать на конкретном примере актуальность, своевременность, важность и большие возможности современной методики соизучения языка и культуры с использованием технических средств.

Разработанный видеокурс позволяет формировать у иностранных учащихся более адекватную культурную картину мира российской действительности, а также их лингвистическую, лингвокультурологическую и коммуникативную компетенцию.

Положительным результатом лингвострановедческого видеокурса может считаться предложение учащихся продолжать работу в рамках созданного курса и в следующем семестре, что свидетельствует о его важности и целесообразности.

(Orlyanskaya T.G. 北海道大学)

【C40】

«Медленное чтение» как синтез изучения языка, литературы и культуры

Маргарита Казакевич

1. «Медленное чтение» (термин литературоведа и философа начала XX века М.О. Гершензона) — отчасти позабытый метод глубокого филологического (без разделения на литературоведение и языкознание) проникновения в художественное произведение с целью наиболее полного и точного понимания **авторского** смысла. Можно сказать, это «честное» чтение: мы не «вчитываем» в текст свои, порой произвольные смыслы, а вычитываем из него авторские. Метод подразумевает анализ разных уровней художественного текста — грамматического, семантического, стилистического, анализ исторического, этнографического и биографического фона. Есть восхищенное воспоминание Д.С. Лихачева об опыте такого чтения «Медного всадника» в семинаре Л.В. Щербы в Петрограде.

2. Естественно было бы предположить, что метод «медленного чтения» может оказаться полезным в целях интегративного преподавания русского **языка и культуры** инофонам (носителям другого языка и, соответственно, другой картины мира). Однако, начиная читать русскую прозу в группах японских учащихся, я не думала о Гершензоне и Щербе, осознание того, что мы со студентами делаем нечто подобное пришло постепенно. И так же не сразу я поняла: именно «медленное чтение» — это наиболее верный путь для знакомства с русской **языковой картиной мира**, способ развития вторичной **языковой интуиции** («чувства языка»), побуждение к **языковой рефлексии**. Вначале это было лишь мое личное впечатление. Развернутое анкетирование, проведенное в группах, дало интересные результаты и подтвердило мою гипотезу.

3. Если обычно «медленное чтение» служит инструментом максимально точной, близкой авторскому замыслу интерпретации художественного текста, то для меня и моих студентов этот метод оказался прежде всего способом познания жизни слова в культуре, а через него — синкретическим познанием языка, литературы и культуры.

4. В докладе будут представлены фрагменты работы по методу «медленного чтения» на основе рассказа А.П. Чехова «Тина» и некоторых других произведений: способы комментирования, типы вопросов, иллюстративный ряд.

(Margarita Kazakevich, 大阪外国語大学)

【C41】中国黒龍江省遜克県アムール河沿岸のロシア族
集落

塚田 力

中華人民共和国公民はごく少数の例外を除き民族籍を持つ。民族籍にはロシア族というカテゴリーも存在する。2000年の調査では全国で15,609人が登録されている。ロシア系の先祖をもつ者は、民族籍をロシア族として登録することができる。現在の中国黒龍江省におけるロシア系住民の大多数は漢族との混血の住民である。民族籍はロシア族の者と、漢族の者が大半を占め、少数ながら現在も外国籍、無国籍の者もいる。多くの少数民族の集住地区では、民族区域自治を行っている。

ロシア族の場合、1994年に成立した内蒙古自治区額爾古納市にある恩河ロシア民族郷(2001年より室韋ロシア民族郷)が従来唯一の民族自治単位であった。

中国東北部黒龍江省のアムール河(黒竜江)南岸に位置する遜克県边疆鎮边疆ロシア民族村には、現在も数百名のロシア族住民が居住しつづけている。边疆村は小規模な農村で、はじめての定住者が現れたのは19世紀末である。

ロシア系住民の多数は、ロシア革命後の混乱期、アムール州(主として対岸のポヤルコヴォ村)から移住してきたコサック出身の女性たちと、主に山東省出身の漢族男性たちの末裔である。満州国時代の記録によれば、1940年の時点での村の総人口は男性393人女性214人であるが、ロシア族は女24人のみで男性はいなかった。

解放後、農業集団化が行われた。1968年にはプロレタリア文化大革命の影響がこの村にも及んだ。「反右傾」、「ソ修・米帝・蔣派・日本特務・叛徒」摘発、「清理階級隊伍」の各運動が展開され、ロシア族は特務などの疑いをかけられ投獄などさまざまな抑圧が加えられた。

高齢の女性を中心とした彼らの一部は、中国政府公認のプロテスタント教会の聖書やカレンダーなどを使用して日曜ごとに寄り集まり礼拝を繰り返しているが、宗教知識が非常に乏しく、私が面談した人々は全て東方正教との違いも認識していなかった。漢民族との通婚を通じて、彼らの漢民族への同化が進んでいるが、年長者はロシア語話者であり、方言・生活習慣などに今なおロシア文化を色濃く残している。

边疆村は2004年に边疆ロシア民族村への改組をなしとげた。ロシア族の文化を尊重した村づくりが進められていくとされている。対岸への農業労務輸出や、ロシアにいる親族との相互訪問も行われている。

(つかだ つとむ、北海道大学 大学院生)

【C42】ソヴィエト政権初期聾教育システムと全ロシア
聾協会の教育活動に関する一考察

白村 直也

ソヴィエト聾教育に関する一連の先行研究において、1920年代中・後期ソヴィエト聾教育システムを記述する際には、次のようなシステムの記述で完結している。つまり、3歳から8歳までの就学前教育、そしてその後の障害の重度によって規定される8歳から16歳まで(例えば弱聴児は5-6年とされる)の通学・寄宿制学校である。従って、その後の16歳以降の継続的教育システムの存在の有無に関して疑問が提示される。

上記のような問題意識において、本報告では、1926年に設立されて以降、ろう者等に対して、積極的な教育活動を展開していった全ロシア聾協会(以下、協会)の教育活動という視点を提示した。その視点の設定の背景には、次のような理由がある。つまり、①協会が設立当初よりの課題をろう児、弱聴児、大人等の教育、教授、学習における発達、そして職業-労働準備を促進させることとしていた点、また、②1926年9月21日から25日まで開催された全ロシア聾者会議(Всероссийское совещание глухонемых、事実上の第1回全ロシア聾協会会議 Первый съезд ВОГ)にて、ろう者らの教育、職業訓練、ろう者の職業教育への道を設置する必要性を提示し、上述した通学・寄宿制学校卒業後もろう者等に更なる教育を施す必要性を提示している点である。

協会の抱える、それら課題と必要性の意識の二点における一つの現実的施策は、同年1926年から1927年にかけて、協会が独自にろう者のグループ(20名程度と考えられる)を組織し、高等教育機関付属の労農予備校に入学させるという形をもって具現化されている。また、労農予備校の性質上、その卒業後には高等教育機関への進学が想定されるが、ろう者等に対してもその性質は適応されていたとされる。つまりは、先行研究の中の記述に完結するような、高等教育機関への進路が閉ざされていたわけではないことが確認できる。

本報告においては、ろう者等の労農予備校、高等教育機関への入学に関する記述をもとに、次の二点に関して考察することを目的とした。つまり、①労農予備校への入学に関しての協会の組織するグループのあり方、そしてそのグループ形態で授業が如何にして進められていったのか。②1920年代中・後期の聾教育システムを、先行研究での成果をもとに記述しなおすことを試みる、の二点である。

(はくむら なおや、東京外国語大学 大学院生)